

低被ばくかつ簡易的な手段として有用であると考え、今後、SRT、IMRTなどの高精度放射線治療での使用についても検討していきたい。

7. Elekta SynergyにおけるEPIDoseの導入とその評価について

伊藤 拓也, 中村 勇司, 奈良 定広

倉方ありさ, 川上 裕

(渋川総合病院 放射線科)

【目的】 EPID (iView) の画像を用いて線量を評価する EPIDose の基本性能の確認と強度変調放射線治療における検証での有用性を確認する事。**【方法】** 2次元検出器との比較から EPIDose のモデリングを行い、単純な照射野での線量および線量分布を確認した。また、VMAT プランを用いて検証を行い EPIDose の性能を評価した。**【結果】** 単純な照射野における治療計画線量の再現性は 2 × 2 cm から 24 × 24 cm の照射野において平均 0.37% の誤差であった。VMAT プランではガンマ法 3 mm 3 % においてパス率 97.9% となった。**【結語】** EPIDose は高い利便性や、高分解能という特徴を持、強度変調放射線治療の検証において有用なツールである事を確認した。

8. サーマトロン-RF8 新規導入における使用経験

菅原 幸志, 神保 一樹, 須田 悟志

村田 和俊, 茂木 政彦, 岡崎 篤

安藤 義孝 (日高病院 腫瘍センター)

中野 隆史 (群馬大院・医・腫瘍放射線学)

浅尾 高行, 桑野 博行

(群馬大院・医・病態総合外科学)

高橋 健夫 (埼玉医科大学総合医療センター

放射線腫瘍科)

日高病院腫瘍センターでは、現在 γ -Knife, TomoTherapy, PET/CT, 化学療法を行っている。さらに隣接する平成日高クリニックでは免疫細胞療法が開始され、2011年12月に、サーモトロン-RF8を導入し温熱療法を開始した。群馬大学第一外科と放射線科と連携して、直腸がんに対する肛門温存術前の温熱・化学・放射線(HCR)療法として、当院にて温熱療法(5回)・化学療法(カペシタビン)・放射線療法(強度変調放射線治療)を5週間の入院期間中に行う。その後画像診断(PET/CT・MRI・内視鏡)を行い、術前HCR決定から約2ヶ月後に群馬大学にて手術となる。温熱治療中は医師1名、放射線技師1名、看護師1名にて患者対応し、あらゆる事態にも対応できる体制となっている。2月現在患者数はまだ少ないが、直腸がんの術前HCRから始めていき、今後はTomoTherapyや免疫細胞療法との併用や温熱療法単独

など症例毎に検討していく予定である。今回はサーモトロン-RF8の新規導入における当院での運用、群馬大学との「直腸がん肛門温存術前HCR」の運用について報告する。

〈セッションIII〉

座長：中村 真美 (群馬大医・附属病院・北6階病棟)

9. 重粒子線治療を受ける患者の治療前・治療中・治療後における不安の変化

瀬沼麻衣子, 登丸真由美, 中村 真美

加藤 康子, 今井 裕子

(群馬大医・附属病院・北6階病棟)

【目的】 重粒子線治療を受ける患者の、治療経過に伴う不安の変化を明らかにする。**【方法】** 初めて重粒子線治療を受ける骨軟部腫瘍の患者1名に対して半構成的面接を行い、得られたデータを内容の類似性によりコード化し、カテゴリーを抽出する。**【結果】** 治療の全期間を通して、治療に対する思い、有害事象に対する思い、病気の再発に対する思い、医療者の対応、重粒子線治療のイメージについて不安があることが分かった。**【結語】** 日々の関わりの中で、患者の不安の変化を理解し、不安の変化に応じた援助を行っていくことが大切である。

10. ラジオアイソトープ治療を受ける患者のストレス要因の一考

前田みなみ, 登丸真由美, 中村 真美

加藤 康子, 今井 裕子

(群馬大医・附属病院・北6階病棟)

【目的】 ラジオアイソトープ治療を受ける患者のストレス要因を明らかにし、有効な看護援助の示唆を得る。**【方法】** 初回の放射性ヨード内服療法を受ける患者に対し、治療中のストレス要因を質問紙および聞き取りにより調査し、VASの評価値を分析した。**【結果・考察】** VASは外出できない期間で高値を示した。特に2日目で上昇し、有害事象の出現時期と一致した。閉鎖空間での規制された生活に加え、有害事象の出現によりストレスが増強したと考えられる。本対象はラジオが気分転換となっており、ストレス軽減のための有効な看護介入として、入室前オリエンテーションの充実が有効であると分かった。また治療の流れ、有害事象に関する不安が聞かれ、治療中も知識を補足していくことの重要性が示唆された。